

JAPAN RUGBY FOOTBALL UNION
<http://www.rugby-japan.jp/>



JRFB Japan Rugby
Football Union
財団法人日本ラグビーフットボール協会

RUGBY:FOR ALL

「ノーサイドの精神」を、日本へ、世界へ。

競
技
規
則

平
成
22
年
度

財
団
法
人
日
本
ラ
グ
ビ
ー
フ
ツ
ト
ボ
ー
ル
協
会

競技規則

平成22年度 競技規則

Laws of Game

タグ・ラグビー
U-15ジュニアラグビー
U-12ミニラグビー
2010



財団 日本ラグビーフットボール協会
法人 JAPAN RUGBY FOOTBALL UNION

平成22年度
競技規則

Laws of Game

タグ・ラグビー
U-15ジュニアラグビー
U-12ミニラグビー
2010



財団 日本ラグビーフットボール協会
法人 JAPAN RUGBY FOOTBALL UNION

CONTENTS

第一部

2010-2011

ラグビー競技規則 ————— 4

第二部

2010-2011

U-15ジュニアラグビー競技規則 ——— 16

①U-15ジュニアラグビー競技規則

②安全確保・安全対策強化指導

第三部

U-12ミニラグビー競技規則改訂について — 37

2010-2011

U-12ミニラグビー競技規則 ————— 41

第一部 2010-2011 タグ・ラグビー競技規則

普及・競技力向上委員会では、「全国小学生タグ・ラグビー選手権大会」の開催等で一般的に大きくタグ・ラグビーを認知され、更に平成20年には文部科学省発表の「学習指導要領・体育解説書」へのタグ ラグビー掲載。ラグビー関係者及び学校関係者よりの問い合わせに対する答えとして本則への継続記載を決定した。

尚、「全国小学生タグラグビー選手権大会競技規則」は別途・大会要綱内にて定めたものを適用する。

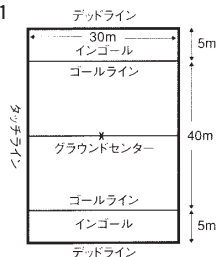
タグ・ラグビーのグラウンドサイズは横 30m×縦 40m（ゴールラインからゴールライン）、インゴール（ゴールラインからデッドライン）は各 5m ずつとする。

1 チームは競技グラウンド内にいる 5 名のプレーヤーと入替可能な 2 名以上 5 名以下のプレーヤーにより構成される。

【補 足】

小学校等の「教育現場」においては、コートの広さは横 15～20m×30～35m、1 チーム 4 人制で試合を行うことができる。導入時期によりプレーヤーの経験又はスキル等を見極めて「広さ、人数」等の指導的アレンジは可能。

図 1



第1条 試合開始時に双方のチーム代表プレーヤーがトスをし、勝った方が試合開始のフリーパス、またはサイドのどちらかを選ぶ。

前半7分－ハーフタイム1分－後半7分とし、前半と後半でコートチェンジを行う。

後半開始のフリーパスは前半のフリーパスでない方のチームが行う。

第2条 フリーパスとはボールを持ったプレーヤーがその位置から動かずに、自分より後方のプレーヤーにパスをすることである。その時相手チームは必ず5m下がらなくてはならない。

【補 足】

- (1) 試合開始・得点後の再開・反則やタグ4回等による攻守の交替時のゲームの再開は、フリーパスによって行う。
- (2) フリーパスは、必ず、レフリーの指示の後に行われ、クイック・スタートは認められない。レフリーは、守るチームのプレーヤーが5m以上下がっていることを確認した後に、フリーパスを行う指示を出す。
- (3) ゲームの再開の場所が、ゴールラインから5m以内、または、インゴールとなる場合、その地点からタッチラインに平行したゴールラインから5mの地点でフリーパスを行う。

第3条 試合開始はグラウンドセンターからのフリーパスにて行う。

トライ後の再開はグラウンドセンターからトライをとられたチームのフリーパスにて行う。

第4条 ボールを持ったプレーヤーは前後左右どの方向にも自由に動くことができる。

第5条 守るチームのプレーヤーは相手チームのボールを持つプレーヤーのタグを取ることができる。

第6条 タグを2本ともつけたプレーヤーだけがプレーに参加でき、またトライをすることができる。2本のタグをつけないプレーヤーがボールを持った場合は反則とし、その地点から相手のフリーパスでゲームを再開する。トライ直前にタグをとられたプレーヤーがそのままインゴールに入ってトライしても、トライは認められない。ゴールラインから5m地点までもどって、フリーパスでゲームを再開する。

【補 足】

- (1) 『タグを2本ともつけた』とは、タグをからだの両サイド（タグをつける位置は、からだの真横）につけていることを意味する。
- (2) からだの片側に2本つけている状態や1本しかついていない状態ではプレーに参加することはできない。このような（タグを正当につけていない）プレーヤーが

① ボールを保持しているチームの場合

ボールをプレーした場合（ボールを持って走っている間にタグが落ちた場合を含む）は、それまでボールを保持していなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。

② 守るチームの場合

タグを取った場合は、それまでボールを保持してい

た側のフリーパスでゲームを再開する。(タグの回数は“0回”に戻る)

- (3) 相手からタグが見えやすいようにするため、上着がベルト位置より長い場合は、上着の上にタグベルトをつけるか、上着をパンツの中に入れるようにする。

※ タグの正しいつけ方と正しくないつけ方の例

図2 ○
両サイド(真横)に1本ずつ



図3 ×
2本とも片側についている



図4 ×
1本しかついていない



図5
上着はできるだけ
パンツの中に入れる



図6
上着を入れずにタグを
つけるとタグが取りにくい。
また、取られた後につける
際にも上着がじゃまになる

× 緑と緑

○ 緑と赤



図7
タグをわかりやすくするため
パンツ等との同系色は避ける
× 左は緑と緑
○ 右は緑と赤

第7条 得点は、ボールを持っているプレーヤーが相手インゴールにボールを置くことによって得られる。ゴールラインはインゴールであり、タッチインゴールライン及びデッドラインはタッチである。トライは立ったままで行われなければならない。その際、両足はインゴール内に入っていないなければならない。片足または両足がインゴールに入っていない状態でトライは認められず、ゴールラインから5m地点までもどって、それまでボールを保持していた側のフリーパスでゲームを再開する。

【補 足】

- (1) トライをするためには下記のことが条件となる。
 - ・両足がインゴール、または、ゴールライン上にある
 - ・タグを2本ともつけている
 - ・不当に頭を下げた姿勢（飛び込むような姿勢）ではない
- (2) インゴールに入った後（トライをするまでの間）にタグを取られた場合、トライは認められない。
- (3) トライをするために地面に向かって飛び込む行為は禁止する。この反則があった場合は、ゴールラインから5mの地点でそれまでボールを保持していなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。
- (4) ボールを持ったプレーヤーがタグを取られた後にインゴールに入った場合やインゴールに入った後にタグを取られた場合、ゴールラインから5m地点でそれまでボールを保持していたチームのフリーパスでゲームを再開する。（それまでのタグの回数は継続する）
- (5) 両足がきちんとインゴールにない状態でトライの動作をしてしまった場合、反則ではなく、ボールがプレー

できなくなったものとして、ゴールラインから5m地点でそれまでボールを保持していたチームのフリーパス（タグの回数は継続）でゲームを再開する。

第8条 タグを取ったプレーヤーは、タグを相手に手渡しで返すまでプレーすることはできない。また、タグを取られたプレーヤーは取られたタグを返してもらい腰に付けるまでプレーすることができない。

図8 タグを返す



第9条 ボールを持ったプレーヤーは、タグを取られないように手で押さえたり、体を一回転以上させたりすることはできない。

【補 足】

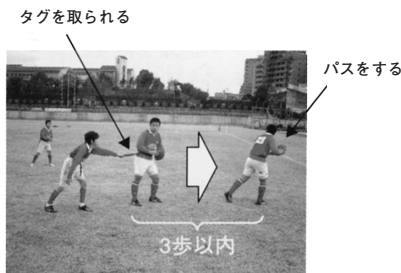
からだを一回転以上回転（くるくる回る）させてタグを取られないようにすることは禁止する。

第10条 タグを取られたらただちに前進をやめ、ボールを離さなくてはならない。めやすは3歩以内だが、すぐに前進をやめられたのに故意に前進を続けたとレフリーが判断した場合は、たとえそれが3歩以内であったとしても反則とする。

【補 足】

- (1) この反則の名称をオーバーステップとする。
- (2) 『3歩以内』というのは、『3歩進む権利がある』という意味ではなく、「走っていて止まるのに3歩程度必要」という考え方の上のものであり、故意に進もうとするプレーヤーに対しては反則を適用する。
- (3) タグを取られて『3歩以内』に下記のいずれかが起きた場合は、その地点からそれまでボールと保持していなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。
 - ① タッチラインに触れる、または、タッチの外に出る
 - ② タッチインゴールラインかデッドラインに触れる、または、それらの外に出る
 - ③ ボールを前に落とす、または、前に投げる
 - ④ その他の反則をするタグを取られる

図9
タグを取られたら
3歩以内にパス



第11条 試合中、相手プレーヤーと体がぶつかるプレーをすることはできない。

具体的には、タグを取りに来た手を払うこと、手で相手を突くこと、相手を捕まえること、体当たりすることな

どであり、手を広げてのディフェンスも禁止とする。また、タグを取りにいく際に、自分からは遠い側のタグを故意に取りに行くことにより、相手プレイヤーの前進を妨害し接触を誘発するタグの取り方も禁止する。



図10

タグを取りにきたプレイヤーの手を払いのける

(特に走っていると時の内側の手が当たってしまい、結果として相手を妨害することがある)

【補 足】

- (1) ボールを保持しているチームのプレイヤーが、守るチームのプレイヤーがいるところに当たりに行くことをオフェンス・チャージと呼び、守るチームがボールを持ったプレイヤーの進路を故意にふさぎに行くことをディフェンス・チャージと呼ぶ。おのおの故意に当たりに行くことは危険なプレーとして反則を適用する。
- (2) ボールを持ったプレイヤーのからだの遠い側のタグを取りに行く、また、両サイドのタグを同時に取りに行く事は、ボールを持ったプレイヤーに対する前進の妨害として反則を適用する。



図11

遠い方のタグを取りに行く



図12

手を広げてディフェンスをする

- (3) これらの反則が起きた場合、反則を起こさなかったチームのフリーパスでゲームを再開する。

第12条 一切のキックは禁止し、地面に転がったボールもかがむなどして立ったまま手で拾わなくてはならない。

第13条 ボールは自分より前に投げることはできないが、真横へ投げることはできる。

自分より前に投げた場合はスローフォワードとし、パスを受け損なって前に落とした場合も前に投げたとみなしノックオンとする。スローフォワードやノックオンが起こっても、そのボールを相手が拾うなどした場合は、アドバンテージを適用して反則をとらないこともある。

【補 足】

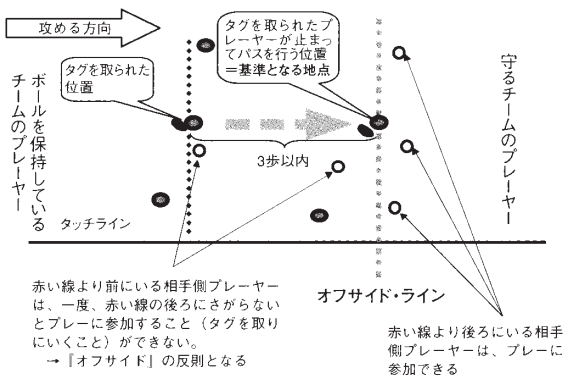
アドバンテージはスローフォワードやノックオン以外の反則に対しても適用される。

第14条 タグを取られたプレーヤーの地点を基準として、守るチームはその地点より相手側でプレーすることはできない。

【補 足】

- (1) この地点は、タグを取られた地点ではなく、第10条で述べた『3歩以内』のボールを離す位置となる。
- (2) ボールを持ったプレーヤーがタグを取られても、それまでにタグを取られた回数が4回未満の場合はただちにパスをすることによりプレーをすることができるが、その場合、守るチームのプレーヤーは、タグを取られたプレーヤーの地点を基準にゴールラインに並行した

図13 タグを取られた後の再開の地点（基準となる地点）



線より下がらなくてはならない。下がらない場合はオフサイドとなる。ただし、プレーがただちに行われたため、基準となる地点より下がりきれないプレーヤーは、一旦、基準となる地点に下がるまでプレーに参加しなければ（またはプレーの邪魔にならなければ）、レフリーはアドバンテージを適用して反則を取らないこともある。

- (3) 図14・15のどちらの場合も「オフサイド」となり、「基準となる地点」からそれまでボールを保持していた側のフリーパスでゲームを再開する。（タグの回数は「0」に戻る。



図14

- ・ 白い破線が『基準となる地点』に平行する線
- ・ 真ん中のプレーヤー（相手側）が、パスの前に線を越え、パスをすることを妨げている、または、インターセプトをしようとしている



図15

- ・ 白い破線が『基準となる地点』に平行する線
- ・ 左のプレーヤー（相手側）が、一度、線の後ろに下がらずにパスを受けたプレーヤーのタグを取りに行っている

第15条 フリーパスから最初のパスをもらうプレーヤーはパスする選手から2 m以内にいてはならない。走りながらパスもらう場合はそのスタートする地点から2 m以内とする。

第16条 上記第8条～第15条の禁止事項は反則となり、その地点から相手ボールのフリーパスとなるが、反則をしたチーム側のゴールラインから5 m以内の反則の場合は5 m地点でのフリーパスとなる。

第17条 タグを4回取られると最後にタグを取られた地点から相手ボールのフリーパスとなる。

第18条 タッチライン上はグラウンドの外でありそれはインゴールにおいても同様である。

ボールを持ったプレーヤーがタッチラインを踏んだ場合やタッチラインから出た場合、またボールがタッチラインに触れた場合やタッチラインから出た場合はその地点のタッチランの外から、その時点でボールを持っていた

チームの相手チーム、もしくは最後にボールに触れたチームの相手チームのフリーパスとなる。タッチラインの外からのフリーパスはタッチライン上の地点より直角もしくは後方へのパスとする。ゴールラインから5 m以内でタッチラインから出た場合は、次のフリーパスはゴールラインから5 mのタッチライン上から行う。

【補 足】

ボールが地面に転がるなどして、ボールがタッチになる前にどちらのチームのプレーヤーが最後にボールに触れたか疑わしい場合は、『攻撃側』のフリーパスでゲームを再開する。この場合、どちらのチームがフリーパスを行う場合でも、タグの回数は“0回”になる。

攻撃側＝その地点が自陣側にあるチームの相手側
チーム（地域的に進んでいる側のチーム）

第二部 2010-2011 U-15ジュニアラグビー競技規則

【2010—2010・U-15ジュニアラグビー競技規則】

平成22年度（2010—2011）U-15ジュニアラグビー競技規則

はじめに

本年度、(財)日本ラグビーフットボール協会では15才—13才時期（以下「U-15」という。）の中学生プレーヤーに適用する「U-15ジュニアラグビー競技規則」については、記載内容を明確にするために、一部文章の訂正、及び説明文章の明確化などを行っておりますので通知いたします。関係各位におかれましては、ご認識の上、ご対応の程よろしくお願い申し上げます。

「競技規則に関する背景・趣旨」

(財)日本ラグビーフットボール協会は、国際ラグビーボード（以下「IRB」）が目指すラグビーフットボール競技の健全な発展のための方向性を見据え、IRBが定めるラグビーフットボール競技に照らし、日本国内独自で適用しているジュニアラグビーの競技規則が、その整合性を担保できるよう継続的に検討しています。当然なことではありますが、U-15のラグビープレーヤーにとって最良、かつ安全性を確保できることを原則として、より良いジュニアラグビー競技の実現を目指し、同時にU-12（12歳以下）のミニラグビーからU-15のジュニアラグビー、そして高校生以上のフルラグビーという年代間

の整合性についても、現状に照らして継続的に検証・検討しております。その結果、本年度は、大きな改訂は行っていないものの、文章が曖昧な箇所の補正・加筆等、規則の運用を徹底していただく為に、一部、記載文章を変更し、下線 _____ で表示しています。

「実施時期」

2010年—2011年U-15ジュニアラグビー競技規則は、2010年9月1日から施行いたします。

① U-15ジュニアラグビー競技規則

「基本原則」

15才～13才時期（以下「U-15」という。）の中学生プレーヤーの試合に適用するU-15ジュニアラグビーの競技規則は、インターナショナルラグビーボード（IRB）が定める競技規則に準拠する。また19才未満プレーヤーのための標準競技規則、及び日本ラグビーフットボール協会の定める高専、高校以下のための日本国内特別競技規則に関してはその趣旨を認識し準拠する。その中でU-15に適用する独自の競技規則については本U-15ジュニアラグビー競技規則において規定する。

第3条 プレーヤーの人数

1. プレーヤーの人数

双方12名以内のプレーヤーによって行う。

2. 登録プレーヤー・リザーブ登録・交替（新規）

チームのメンバー登録は22名とし、キックオフからノーサイドまでの間の任意の時に4名の交替を行うこととする。

その他、試合途中において登録されたりザーブプレーヤー全員の交代を認める。

リザーブの登録は必ずフロントローのプレーヤーを含めることとする。

【補足説明】

平成20年度までは原則としてハーフタイムに4名の交替をすることと定めていましたが、交替についてはハーフタイムを含む任意の時期といたします。但し、

キックオフ直後、あるいはノーサイド直前の交替を推奨するものではなく、U-15年代の指導者の良識に従うことにいたしました。なお、U-15年代の選手育成、普及活動の推進という観点から本事項については、三地域協会においてローカルルールの柔軟運用を認めることといたします。

3. 一時的交替と応急処置「安全対策・指導措置」

出血の有無に関わらず、プレーヤーが負傷し応急処置、或いは医師の治療を受ける必要があると判断される場合は、一時的交替を認める。

〔注意〕レフリー又は競技責任者は、プレーヤーが負傷した場合は、そのプレーヤーの安全の確保を最優先し、直ちに応急処置、或いは医師の治療を受けるよう指導する。

注意事項

(i) 登録プレーヤー数と最低交替人数の特例措置

但し、チームのメンバーが22名に満たない場合は、プレーヤーの安全確保を優先し、三地域協会の事前の承認の下、その現状を考慮し主催する各協会の決定により別途登録人数、交替人数を規定することができる。

(ii) 年代別（エージ制）・体重制などの導入

三地域協会は、主催ゲームに関してプレーヤーの安全を考慮した年代別（エージ制）、体重制を導入することができる。その他の試合・大会においては、三地域協会の事前の承認の下、主催者が定めるか、当事者間で話し合い、別途定めることができる。

第4条 プレーヤーの服装

1. マウスガードの装着 「安全対策・指導措置」

原則としてプレーヤーはマウスガードを装着するよう努める。(当面の間、各協会及び指導者は、プレーヤーがマウスガードを装着するよう指導する。)

【補足説明】

成長期にあるU-15のプレーヤーにはマウスガード装着による安全対策は欠かせないという認識であり、義務化することが望ましいというのが基本方針です。このため、各地域で準備を進めているのが現状です。また、U-13カテゴリーのプレーヤー、或いはU-14カテゴリーのプレーヤーにおいては、永久歯に生え変わっていない乳歯のある場合、及び歯科矯正などを行っているプレーヤーがいますが、マウスガード装着を推進している歯科委員会の専門医の方々は、このようなケースについては特にマウスガードを装着することによる安全対策とリスク回避が重要との見解です。なお、マウスガードは専門の歯科医で作成することを薦めています。

2. ヘッドギアの着用 「安全対策」

プレーヤーは試合中ヘッドギアを着用しなければならない。原則としてIRBマークのついたヘッドギアとする。

3. 着用を自粛するもの「指導措置」

ヘッドギアのサイズを調節する後頭部のヒモなどの付属品はヘッドキャップ本体と同色、同系色又は黒などとし、華美にすることはできない。

第5条 試合時間

1. 試合時間

U-15カテゴリー、U-14カテゴリーにおける試合時間は40分以内に加えて、ロスタイムとする。試合は、競技時間20分ずつ前後半に分けて行う。

また、U-13カテゴリーの試合時間は30分以内に加えて、ロスタイムとする。試合は、競技時間15分ずつ前後半に分けて行う。

【補足説明】

エージ制の推進によりU-13カテゴリー（中学1年生のみのプレーヤーで構成するチーム）などの試合が増加しており、当該試合時間を明記いたします。附則の定義のカテゴリーを参照して下さい。

2. ハーフタイム

ハーフタイムの休憩時間は5分以内とする。

3. 一時的退出（シンビン）

一時的退出は、U-15カテゴリー、及びU-14カテゴリーでは20分ハーフずつの試合の場合は5分間とし、17分ずつのハーフの場合、及びU-13カテゴリーでは4分間とする。

【補足説明】

U-15の試合時間はフルラグビーの概算半分であるため、一時的退出も同比率に該当する時間と考えるのが妥当であり、現実には実施されておりますが、これをより明確にする為に競技規則に明記いたします。本年度は、特にU-15、U-14カテゴリーでの17分ハーフで実施する試合での一時的退出時間を明記しています。

4. 1日2試合実施する場合の試合時間（安全対策）

U-15カテゴリー、U-14カテゴリーにおいて同一チームが1日2試合を行う場合、試合時間は合計70分を超えてはならない。この場合、競技時間は17分ずつ前後半で行う。また、U-13カテゴリーで2試合を行う場合は、1日1試合の場合と同様に15分ずつ前後半で行う。

【補足説明】

本規則は、同年代の選手の健康を配慮し、安全対策を徹底する趣旨で設定するものです。なお、附則の2.（後述）：1日あたりの試合制限において「同一チームに1日2試合を超える試合に参加させてはならない。」という事項についても確認の上、徹底してください。

第10条 不正なプレー

1. 危険なプレー「安全対策」 罰 PK

いずれのプレーヤーもモールへの参加を含む全ての局面において頭を肩や腰より低く（ローヘッド）するプレーをすることはできない。

【補足説明】

U-15のプレーヤーの安全確保を優先し、同時に安全対策を強化、確認するため、本競技規則において禁止行為として明記いたします。U-15のプレーヤーは、タックル時、タックル後のジャッカル、ボールを確保する行為、ラックの形成前からラック・モール形成時を含めた全てのプレーにおいて顔を下に向け、頭を下げるプレーを禁止していますので、厳格

履行してください。

第17条 モール

1. モールの引き倒し 「安全対策」 罰 **PK**

プレーヤーは、モールを引き倒して防御することはできない。

【補足説明】

I R Bが定める競技規則と同様の事項であるため、記載の必要はありませんが、本競技規則ではU-15のプレーヤーの安全確保を優先し、禁止行為として明記いたします。

第19条 タッチおよびラインアウト

1. ラインアウトの形成とラインアウトプレーヤーの人数

罰 **FK**

ラインアウトはタッチラインより5メートルから15メートル以内で形成し、ラインアウトに並ぶプレーヤー(ラインアウトプレーヤー)は双方2人～5人とする。

【補足説明】

ラインアウトはタッチラインより5メートルから15メートル以内で形成し、ラインアウトに並ぶプレーヤー(ラインアウトプレーヤー)は双方2人～5人とする。

2. ラインアウトにおける制限

(a) プレーヤーのサポート 罰 **PK**

ジャンプする味方のプレーヤーを持ち上げるか、サポートする場合は、後方、正面からを問わずにジャンプするプレーヤーのパンツ(ショーツ)を順手で握ってサポートしなければならない。なお、プレーヤーの太ももを直接サポートすることはできない。サポ

ート、又はリフティングは後方から1名、正面から1名で行う。

【補足説明】

プレイヤーの安全を確保するために、U15の独自ルールである後方、正面からを問わずにジャンプするプレイヤーのパンツ（ショーツ）を順手で握ってサポートしなければならないことについては継続的に実施いたします。

(b) プレーヤーを地上におろす 罰 PK

サポート、又はリフティングは、跳び上がったプレイヤーの両足が完全に着地するまで続けなければならない。

【補足説明】

(c) ラインアウトの外からのサポート「指導措置」

ボールを投入するプレイヤー（スローワー）の相手側（ディフェンス側）のプレイヤーが、タッチラインと5メートルラインの間（ラインアウトの外側）からラインアウトに並んでいる味方のプレイヤー（ラインアウトプレイヤー）をサポートすることはできない。

【補足説明】

I RB競技規則：第19条. 8（j）の規定によって、実質的に同プレーを行うことができませんが、確認の為、継続的に記載いたします。

《I RB競技規則：第19条. 8（j）》

「タッチと5mラインの間にいるプレイヤー：ボールを投入する側でないチームのプレイヤーは、ラインアウトが形成されるとき、自チームの側のタッチ

オンラインと5mラインアウトの間にプレーヤー1名を置かなければならない。このプレーヤーは、ラインオブタッチから2m離れ、また、5mラインから2m離れなければならない。」

3. ラインアウトプレーヤーの人数 「指導措置」

クイックスローイングを除いて、投入側はラインアウトに並ぶプレーヤー(ラインアウトプレーヤー)の人数を相手側に提示し、投入しない側は投入する側の人数に合わせなければならない。レフリーはラインアウトに並ぶプレーヤーの人数を投入側に確認し、投入しない側が人数を合わせるよう指導する。

【補足説明】

U15のプレーヤーの習熟度、熟練度を考慮し、本項目を継続します。

第20条 スクラム

1. プレーヤーの人数 罰 PK

スクラムの形成は、双方それぞれ5人のプレーヤーによらなければならない。いかなる場合もこの人数を超えるか、又は減らすことはできない。

2. 安全でしっかりとしたスクラムの形成

「安全対策・指導措置」

双方のフロントローは、膝を十分に曲げ、腰を落とすと同時にしっかりと背中をまっすぐにし、頭を上げたスクラムの正しい姿勢をとる。レフリーはこの姿勢を「クラウチ」の声で確認し、「タッチ」で双方のプロップが確実に相手の上腕にふれるよう指導、「ポーズ(或いはホールルド)」で双方が上腕に触れ合っていることを確認、「エ

ンゲージ」で安全、且つしっかりとスクラムを組むよう慎重にコントロールすることとする。プレーヤーは一連の動作を確実に行なわなければならない。

特にU-15カテゴリーでのスクラムは安全を確認した上で、しっかりと組み合うよう指導することとする。

3. ロックのバインド 罰 PK

ロックは、お互いが必ずバインドし、外側の腕は必ずプロップの腰をまくように、組まなければならない。

4. スクラムの移動 罰 FK

スクラムは原則として押すことはできない。故意ではなく不可効力によってスクラムが1メートル移動してしまった場合は、元の位置に戻して再びスクラムを組む。

5. スクラムハーフのオフサイド

罰 PK

スクラムでのボールを獲得しなかった側のスクラムハーフのオフサイドは以下の通りである。

【補足説明】

本項（1）はU-15の独自ルールです。

I R B 競技規則：第20条12.（d）（e）に規定の事項を確認し、本項のU15独自ルールを踏まえて確かな運用を行っていただくために以下に補足説明いたします。

- （1） スクラムの開始時・・・両方（攻撃側、防御側とも）のスクラムハーフはボールを投入する側にいなくてはならない。
- （2） ボールの投入後・・・ボールを獲得できなかった防御側のスクラムハーフは、次の3つのいずれかの位置にいなければならない。

- ① ボールの投入側で、スクラムのセンターラインを超えない位置にいる（U15独自ルール）。
 - ② スクラムの味方側の最後尾の位置までまっすぐに下がり、そのスクラムの最後尾を通る線（旧ルールでのオフサイドライン）を超えない位置に立つ（この場合、スクラムに近接している必要はない）。
 - ③ スクラムに参加していない他のプレーヤーと同様に、5m後方のオフサイドラインまで下がるという選択もできる。ただしこの場合は、例えターンオーバーされてマイボールになっても、ボールを取るために5mのオフサイドラインを越えて前に出た場合、オフサイドとなる。
- (3) ボール投入後、ボールを獲得した側のスクラムハーフも、味方スクラムの最後尾を通る線（旧ルールでのオフサイドライン）を超えなければ、どの位置に立ってもよい（5m後方のスクラムに参加していないプレーヤーのオフサイドラインまで下がらなくてもよい）。

留意事項：U-15ジュニアラグビー競技規則では後述の6. スクラムの終了において、スクラムの最後尾（2列目）のプレーヤーが、足もとにボールがある状態で、故意にバインドをはずしてボールを拾い上げることはできないと規定しています。このため、スクラムハーフが5m後方のスクラムに参加していないプレーヤーのオフサイドラインまで下がった場合、当該スクラムハーフはスクラムに参加していないプレーヤーと同様のオフサイド規定が適用されるため、ボールを獲得した側のアドバンテージを失うリスク

があることに留意してください。その他のスクラムにおけるスクラムハーフに関するオフサイドの規定はIRBの定める競技規則と同様です。

6. スクラムの終了 罰 **PK**

スクラムの最後尾のプレーヤーが、その足もとにボールがある状態で、バインドをはずしてボールを拾い上げることによってスクラムを終了することはできない。

(a) 故意のプレーの禁止 罰 **PK**

故意にスクラムの中にあるボールをプレーヤーが足で最後尾のプレーヤーの横のスクラム外にボールを出すことによって、スクラムを終了させ、最後尾のプレーヤーがボールを拾い上げることはできない。

(b) スクラム終了後の最後尾のプレーヤーのプレー

但し、故意ではなく、スクラムのトンネル以外からボールがスクラム外に出たことによってスクラムが終了し、その後に最後尾のプレーヤーが最初にボールを拾い上げることはできる。

7. ノンコンテストスクラムの適用「安全対策・指導措置」

以下の場合、安全を優先し、ノンコンテストスクラムを適用する。

フォワードプレーヤーが負傷し、退場による交替、又は負傷による応急処置や治療が終わるまでの一時的交替が必要な場合で、出場するプレーヤーにフォワードプレーヤーがいないか、フォワードの訓練を受けていない場合は、その後に生じたスクラム、或いは負傷したプレーヤーがゲームに復帰するまでの間に生じたスクラムについてはこれを行わず、ノンコンテストスクラムとする。

《 附 則 》

1. ポジションと呼称

〔ポジション配置〕

12人制ジュニアラグビーのポジションは、フロントロー3名、セカンドロー2名、スクラムハーフ1名、スタンドオフ1名、センター2名、ウイング2名、フルバック1名からなる

〔ポジションの呼称〕呼称は以下の通りとする。



2. 1日あたりの試合制限 「安全対策」 (改訂)

地域協会、都道府県協会（支部協会）は主催する試合や大会において同一チームに1日2試合を超える試合を提供してはならない。また、当協会に登録している全てのチームは、公式、対外、交流、練習などの如何を問わず、U-15のプレーヤーに対して1人1日2試合を超える試合に参加させてはならない。また、前述の第5条の4.「1日2試合実施する場合の試合時間」を厳守し、同一プレーヤーが、1日70分を超える試合を行ってはならない。なお、U-

13カテゴリー、及び中学1年生のプレーヤーについては1日60分を超えないこととする。

【補足説明】

選手の安全を確保し、健全な競技環境を整える為に記載するものです。プレーヤーの傷害事故の受傷状況を検証すると過度な競技時間（試合数）が原因となっている受傷例が散見されています。このような傷害事故を防止する為の措置ですので、ご認識下さい。

3. 定 義

(1) エージ制カテゴリーに関するガイドライン「指導措置」

U-15（13～15歳時期）のプレーヤーに適用する本競技規則では、原則として以下のエージ制カテゴリーをガイドラインとする。三地域協会、支部（都道府県）協会においては本エージ制カテゴリーを指針とするよう務める。

- ・ U-15カテゴリーとは、中学2、3年生のプレーヤーで構成するチーム、及び当該チームによる試合
- ・ U-14カテゴリーとは、中学1、2年生のプレーヤーで構成するチーム、及び当該チームによる試合
- ・ U-13カテゴリーとは、中学1年生のみのプレーヤーで構成するチーム、及び当該チームによる試合

【補足説明】

近年、各地域や支部協会でもエージ制の導入が推進されていますが、本項でU-15における各カテゴリーを表記し、関係者の方々の意識を統一していただく為にガイドラインとして記載するものです。

(2) ローカルルールに関するガイドライン

第3条の注意事項では、三地域協会、又は三地域協会の事前の承認の下、支部（都道府県）協会はロー

カルルールを定めることができるが、本事項はその地域の実情に合わせて特例として認めるものであり、いかなる場合でもプレイヤーの安全を考慮した決定でなければならない。また、本競技規則に対してローカルルールを優先することはできない。

【補足説明】

本協会では、日本全国で統一したU-15ジュニアラグビー競技規則の解釈と運用をしていただくよう推進しています。一方、前述のとおり本競技規則では、一部の規則についてローカルルールの適用を認めています。しかしながら、ローカルルールは、あくまでその地域の実情では本競技規則に対応できないという特殊事情があり、競技の円滑な運営のために特例として認めているものだということを認識していただくために記載するものです。

② 安全確保・安全対策強化指導

「U-15（15～13歳）ジュニアラグビー指導者・関係者、 U-15中学生プレーヤーの皆様へ」

U-15（15～13歳）の中学生プレーヤー諸君の安全確保については日頃から選手諸君自身、及び指導者・関係者の方々は管理、あるいは注意されていると認識しておりますが、さらに一層、安全対策を強化していただきたくお願い申し上げます。確認の為、以下に特に注意していただきたい事項を記載いたしますのでご一読の上、周知徹底の程、お願いいたします。また、U-15（15～13歳）の中学生プレーヤー諸君にはよくお読みいただき実行してください。

〔注意〕安全対策は下記事項の他、重症事故対策本部の安全推進講習会、及び各協会の安全対策委員会、コーチ委員会等から出されている通知、通達、注意事項を充分に考慮して周知徹底の上、厳格履行して下さい。

1. 「プレーヤーの健康管理の徹底」

(1) 健康（体調）管理

プレーヤーは体調不良、特に頭部に違和感、頭痛、記憶が定かでない状況や打撲や圧迫などによる胸痛、腹痛などの兆候が少しでもある場合は、直ちに練習、試合を中止して医師の診断を受ける。指導者はプレーヤーの体調について十分に管理監督する。

(2) 脳しんとう報告と安静期間の遵守

脳震盪(脳しんとう)を起こしたプレーヤーは必ず所属する協会に報告し、医師の許可があるか無いかに関わ

らず3週間は練習、及び試合を禁止する。

- (3) 軽度の頭部打撲とその後（二度目の頭部打撲による）の重症事故の危険性

軽い頭部打撲でも医師の診断を受けるよう徹底し、練習を休むなど安静にした上で、経過を慎重に見守ること。最近の事例では最初に軽い頭部打撲を負った後、数日から数週間後に二度目の頭部打撲（脳震盪を含む）を起こし、重症事故（死亡事故）に発展しているケースが観られる。一回目の頭部打撲が軽いか、もしくは自覚症状がほとんどなくても頭部内は大きなダメージを受けている可能性があることに充分留意する。

- (4) 熱中症対策

練習、試合に際しては十分に水分補給を行い熱中症の発生を防止する。のどの渇きがあると無いとにかかわらず、練習、試合前には事前にある程度の水分を補給し、練習、試合中ものどの渇きを感じる前に継続的に水分補給を行う。なお、多少、塩分やミネラル入りの水分を補給することが望ましい。

2. 「身体的強化、及び技術的指導による安全確保」

- (1) プレーヤーの首、背中、肩、胸、腹などの強化など

指導者、及びプレーヤーは安全確保を重視し、ラグビーを安全におこなうのに必要な、プレーヤーの首を中心に、首に連なる背中・肩、及び胸、腹などの筋力強化、及び股などの柔軟性強化に努め、プレーヤーが以下のプレーを習得できるよう努める。

〔注意〕実施にあたっては中学生が成長期であり、骨が柔らかいということを考慮してプレーヤー自身の体重（体を利用した）によるトレーニングに限定して、用

具を使つての過度（負荷など）なトレーニングはおこなわないよう注意し、柔軟性を高めることを重視した筋力作りを心がける。

(2) 全てのプレーにおいて

腰よりも頭が下がらないよう充分に注意する。頭が下がるローヘッドは全ての局面で行わない。

(3) スクラム（含むタックル）

膝を充分に曲げ、腰を落とす。背中をまっすぐにし、頭を腰よりも高くする。顔は相手プレーヤーを正面から直視し、スクラム（タックル時もほぼ同じ）の正しい姿勢を作れるよう充分に訓練し、安全でしっかりとしたスクラムが組めるよう努める。（スクラムの段階的な組み方に関しては本競技規則第20条スクラム2.「安全でしっかりとしたスクラムの形成」を参照して下さい）

(4) タックル 1・・・タックルするプレーヤー（以下タックラーという。含むアシスタントタックラー）

①タックラーは相手プレーヤーの動き、走る角度などを確認し、顔を上げて最後まで目を離さずにタックルする。

②タックラーは逆ヘッドにならないよう充分に注意する。

③タックラーは頭を下げずに充分に足を踏み込んでタックルする。くれぐれも上半身だけで飛び込むタックルは行わない。

④タックラーは相手プレーヤーをしっかりとバインドしてタックルする。

⑤タックルが成立した後、タックラーは、タックルしたプレーヤーを離し、立ち上がりボールの争奪

に加わるか、退転する等し、プレーが継続するように努める。

⑥以下のタックルは厳に慎む

- ×手だけで相手のジャージをつかんで振り回すタックル
- ×相手をバインドせずに押し倒すか、突き倒すタックル
- ×あご、顔、頭、肩の上部などの肩よりも高い位置へのタックル(ハイタックル)
- ×腕を伸ばして相手プレーヤーに打ち付けるタックル(スティファームタックル)
- ×ボールを取る前のプレーヤーに対する早すぎるタックル(アーリータックル)
- ×ボールを蹴るかパスした後のプレーヤーに対する遅すぎるタックル(レイトタックル)

(5)タックル 2・・・タックルされるプレーヤー

タックルされた場合を想定してボールを持った状況であごを引いて背筋を丸める正しい受身の動作ができるよう十分に訓練する。

なお、タックルが成立した後、タックルされたプレーヤーは、ボールを離し、立ち上がるか、退転する等し、次のプレーを妨げない。

(6) タックル 後、ジャッカル、ラックの形成前、ラックの形成時等

- ①タックル成立後、ジャッカルを行うプレーヤーは腰を低くし、ローヘッドにならないよう顔を充分に上げて、相手プレーヤーの状況を確認し、相手プレーヤーの動作に対応できるような安全な体勢

を確保する。

②タックル成立後、ボールの上でボールを確保する場合も、上記と同様に、腰を落とし、ローヘッドにならないよう顔を充分に上げて、相手プレーヤーの状況を確認し、相手プレーヤーの動作に対応できるような安全な体勢を確保する。同時に味方プレーヤーの後方からの圧力に対して、足を踏み込むだけでなく、倒れこまないような体制を作る。

③ラックの形成前、ラックの形成時の以下の行為は厳に慎む。

×ボールを超えて飛び込む

×相手を頭から突き倒すか、単に頭から突進する

×手だけで相手のジャージをつかんで振り回す

×倒れている相手プレーヤーを故意に足で踏みつける

第三部 ミニラグビー競技規則改定について

(財)日本ラグビーフットボール協会では、昨年、平成21年度に、次のような基本的な考えに基づきミニラグビー競技規則の改正を行いました。

- ①プレーヤーの安全確保が最優先であることを改めて明確に記載する。
- ②勝利至上主義となることのないよう、また、指導者のあるべき姿を明確にする（ラグビーの楽しさを子供たちに教えるのが指導者である）。
- ③U-15との整合性を取る。
- ④各条文（文言）を見直し、実態に即しているかを検証する。
- ⑤スクラムにおける姿勢等の規定を明確にする。
- ⑥ラインアウトの解消を規定する。
- ⑦各条文、項目をカテゴリーごと（低学年、中学年、高学年）に比較して整合が取れているか検証する。

はじめに

週末に多くの大人が、ラグビースクールで、ボランティアとして子どもたちにラグビーを指導している、という事実は、世界に誇るべき日本ラグビーの文化です。近年のミニラグビーに対する各方面からの支援や、子どもたちのスキルの向上等は、これらのコーチたちの努力が実を結んだものだと言えるでしょう。

しかし、最近、安全への配慮を欠いている、子どもの発達

段階を踏まえているとは言えないプレーが散見されるようになってきました。身体能力の高い子どもを選別し「勝つこと」を最大の目標にして活動しているチームの試合は、コンタクトの激しさ、戦法・戦術などは子どもの試合とは思えないほどであり、もはや「ミニラグビー」とは呼べないものになっています。何より憂うべきは、試合中に大人がプレーヤーに怒声で指示を与えたり、コーチがレフリーに対して罵声を浴びせたり、さらには子どもまでもレフリーの判定に異議を唱えたりと、他のスポーツ界からも賞賛されてきた「ラグビーの美点」を損なう行為がまかり通っている点です。

子どもは小さな大人ではない

ミニラグビーと大人のラグビーとの最大の違い、それは「子どもは小さな大人ではない」という言葉に象徴されるように、プレーヤーである子どもが身体・精神的に発達の上にあることです。子どもは「なすことによって学ぶ」、つまり、体験を通していろいろなことを学んでいく存在です。ラグビーをプレーすることによって得られる様々な経験は、成功も失敗も、子どもにとっては将来の糧です。もし、大人が、目の前の勝利を求めるあまり、子どもたちがラグビー本来の面白さ、そしてラグビー精神やラグビー文化を味わう機会を失っている、さらには誤ったラグビー観を子どもたちに植え付けているとしたら、それは将来に大きな悔いを残すことになります。

ミニラグビーに求めるもの

2008年、(財)日本ラグビーフットボール協会は、「ラグビー普及宣言2008」により、子どもたちに「3 Side精神」の厳守、

指導者には「3Fのコンセプト」に従っての指導を求めました。ラグビーという言葉には、グラウンドでプレーすることだけではなく、多くの社会的・情緒的概念が包含されています。単にプレーのパフォーマンスや試合の結果だけでラグビー、特に子どもたちのラグビーを語ることは慎まねばなりません。我々がミニラグビーに求めるものは、ラグビーに関心を持つ子どもたちが、存分にラグビーを楽しむことであり、ラグビーが大好きになることです。さらには、子どもたちが、ラグビーを通じて健やかに成長することであり、ひいては、明日の社会を担う人材として成長していくことです。

ラグビー精神・文化を正しく伝える

以上の点を踏まえ、平成21年度にミニラグビー競技規則の見直しを行いました。子どもたちが安全に楽しくミニラグビーをプレーできる環境を整えること、さらに、子どもたちにラグビー精神・ラグビー文化を正しく伝えることがそのねらいです。

冒頭にも述べたとおり、我が国の子どもたちのラグビーを支えているのは、無償でコーチをしてくださっている方々です。我々は皆様を誇りに思うと同時に、今後もラグビー普及にご協力くださいますことを、心よりお願い申し上げます。ラグビーが大好きな子どもたちは、将来の日本ラグビー界だけでなく、日本の社会を大きく変えてくれるでしょう。(財)日本ラグビーフットボール協会は、そのような子どもをたくさん育てるために尽力して下さる方々に、できる限りの支援をすることを惜しみません。

【追記1】

子どもたちにミニラグビーを指導する際には、コーチング関連の本の他に「ラグビー憲章（IRB）」「競技規則（IRB）」を必ず読んでおいてください。また、子どもの発達に関する情報を収集しておくことが望ましいでしょう。

【追記2】

ミニラグビー競技規則が地域の実態と適合しない場合には、（「安全」「ラグビーの楽しさの体験」が最優先であるという原則、及び競技規則中の「はじめに」の主旨を損なわない限り）試合を主管・主催する者の責任において、地域の実態に即したローカルルールを適用することを認めます。

2010 - 2011 U-12ミニラグビー競技規則

〔はじめに-ミニラグビーに携わる全ての皆様
(コーチ・レフリー・応援者)へ〕

1 ミニラグビーとは・競技規則制定の前提

ミニラグビーとは、ラグビーフットボールの魅力を広く普及するために作られた、幼児・児童のためのラグビー型ボールゲームです。競技規則は、これをプレーする人たちが幼児や児童(以下子ども)である、という前提に立って制定されています。

2 ミニラグビーでの最優先事項「安全」について

以下の点に留意して、子どもが安全にプレーできる環境を整えてください。

- (1) 子どもの年齢、体力や発達段階、天候、グラウンドコンディション等を考慮した練習・試合を計画、実施してください(特に練習や試合での水分補給については十分に注意を払うこと)。
- (2) ラグビーの魅力の一つとしてコンタクトプレーを挙げる人も少なくありません。しかし、それはプレーヤーの安全性が保証された上で初めて「魅力」と呼べるものです。怪我をする、あるいは相手に怪我をさせる危険性を承知の上でプレーする、させるなどという事態があってはなりません。

特にミニラグビーに携わる大人は、怪我を誘発させるような行為・態度(たとえば、頭を下げて相手とコンタクトする、無防備な体勢でいる相手・体格差のある相手を力任せに突き飛ばす等)に関しては敏感である

べきです。ミニラグビーをプレーしたがために、子どもたちの将来が損なわれることはあってはなりません。仮にそのような事態が生じた場合、ラグビーそのものの存在も危うくなるでしょう。プレーヤーの安全確保は最優先事項であり、大人は、子どもたちの安全を保証した上でラグビーをプレーさせる義務があります。

- ① タックルやモール、ラック等コンタクトを伴うプレーを指導する際には、子どもの発達段階を踏まえた上で、コンタクト時の正しい姿勢を徹底させるとともに、スキル等の指導を十分に行ってください。
 - ② 同時に、コンタクトプレーを行う際には、自分だけでなく、相手の安全の確保も大切であることをあわせて指導してください。
- (3) 指導者は積極的に安全対策講習に参加する、試合でレフリーを行った際に他の指導者と試合中のプレーの安全性について意見交換を行うなどして、安全対策への意識を高めるよう心がけてください。

【追記】用具について

プレーヤーの安全を確保するために、用具についてIRBが競技規則で定めた以外に、以下のように定めます。

- ① スパイクを使用する場合、プレーヤー及び指導者の靴底は非金属製の固定式スタッド及びブレードタイプのものでします。取替え式スタッドの使用は禁止します。
- ② ショルダーパットの使用は禁止します(平成12年通達)。
- ③ マウスガードを使用する場合は、歯科医の監督指導のもとで製作されたものを使用してください。

3 指導者(コーチ・レフリー)の態度について

ミニラグビーは、ラグビーの普及を第一のねらいとして行われるものです。指導にあたっては、「Fight（闘志）」「Friendship（友情）」「Fair play（正しいプレー）」（以上「3 F」）のコンセプトが具現化できるように指導・試合計画を立案するとともに、次に挙げるような、ラグビーの魅力・独自性を、練習や試合を通して子どもたちに体験させてあげてください。

- あらゆる体型、サイズ、能力、スキルを持つプレーヤーが参加できる。
- ボールをもって走る、パスする、キックするなど、多彩なプレーが見られる。
- プレーヤー自身がラグビー精神を理解し、フェアプレーの精神に則ってプレーを展開する。
- プレーヤー・コーチがレフリーの判定を尊重し、レフリーもプレーヤー・コーチに対し敬意を払っている

また、プレーだけでなく、「On Sideの精神…反則をしない」「No Sideの精神…試合が終わったら相手チーム、味方チームの区別なし」「For the Sideの精神…チームのために」（以上3 Side精神）等のラグビー精神、ラグビー文化について、繰り返し指導してください。

【追記】

日本ラグビー界で脈々と「ノーサイド」という言葉と精神が守り続けられてきたことが、ラグビー先進国の関係者から高く評価されています。今後も、日本ラグビーの文化を守り続けるためにも、子どもたちに「ノーサイド」のすばらしさを体感させてください。

(1) コーチとして

- ① 試合に勝つことだけがミニラグビーをプレーする目的ではありません。「全てのプレーヤーに全てのスキルを」を念頭に、ラグビーの魅力を体感できるようにしてください。また、「自らを抑制する謙虚な心と思いやり」をもったプレーヤーを育ててください。
- ② 子どもは大人とは異なった身体的特性・精神的特性を持っています。指導に当たっては、自分の経験からだけではなく、プレーヤーの年齢や心理的、身体的発達特性を理解した上で、その時期に適した練習方法を計画してください。
- ③ 小学生やその保護者にとって、コーチはラグビー精神の具現者です。
 - レフリーに対して
 - オフィシャルに対して
 - 全てのプレーヤーに対して
 - ラグビーに対してどのように振る舞うのが正しいのかを態度・行動によって示してください。
- ④ ミニラグビーの良いプレーは、コーチとプレーヤー、レフリーが一体となって作り上げてください。よいコーチは良い（ミニラグビーの）レフリーになれる可能性があります。どちらも体験してラグビーに関する知見を広げてください。
- ⑤ 試合が終わったら、必ず相手チームのコーチ、レフリーと、危険なプレー、好ましいプレー等について、共通の認識が持てるよう意見交換をしてください。
- ⑥ 試合後に子どもたちの交流がもたれている例は多くありません。「ノーサイドの精神」を養うためにも、

簡単なアフターマッチファンクションやキャプテンのスピーチなどを実施し、相手チームとの友情を深める場を設けるようにしてください。

- ⑦ 応援する保護者にも、ラグビーのプレーの魅力と独自の文化を広めていってください。特に、自分のチームだけでなく、相手チームのよいプレーについても拍手を送る、あるいは、相手の失敗を喜んだりしない、といった応援のマナーもラグビーの一部であることについては、機会あるごとにすべての保護者に伝えていただきたいと思います。

(2) レフリー、タッチジャッジとして

- ① 子どもたちが楽しく・正しくラグビーをプレーできる環境を作るのがミニラグビーのレフリーの役割です。したがって、ゲーム中の事実を判定するだけではなく、ミニラグビー指導者としての立場が要求されることを認識してください。
- ② レフリー・タッチジャッジは中立的立場であり、どちらのチームに対しても助言等をしてはいけません。(危険なプレー、オフサイド等の反則を予防する為の指導は除きます)。プレーヤーに戦術的・戦略的な助言はできませんが、建設的な、良いプレーをしてもらうための声かけは必要です。短く、分かりやすい言葉をかけてあげて、子どもたちがプレーを継続できるようにしてあげましょう。
- ③ ハーフタイムは、ハーフウェイライン付近にとどまるよう努めてください。試合が始まったら、コーチではなくレフリー、タッチジャッジとしての行動を優先しましょう。

- ④ プレーヤーに敬意を表するためにも、清潔でレフリーにふさわしい服装、毅然とした態度、親しみやすい言葉遣いと表情を意識してください。
- ⑤ ノーサイドを宣した後、双方のチームに対し、意欲を喚起するような励ましの言葉をかけてあげてください。
- ⑥ 試合後は、必ず双方のコーチと危険なプレー、好ましいプレー等について、共通の認識が持てるよう意見交換をしてください。

4 応援者として

- (1) 自分のお子さんや、自分のチームのプレーヤーへの声援はもちろんですが、相手チームのよいプレーについて賞賛してあげてください。
- (2) プレーヤーやレフリーへの暴言は厳に慎んでください。また、相手の失敗を嘲笑したり、自分のチームのプレーヤーの失敗を罵ったりすることはあってはなりません。もし、そのような方がいらしたら、周りの皆さんが注意をしてあげてください。

試合に関する諸規則

「基本原則」

U-12（12歳以下）の年代の試合に適用するU-12ミニラグビーの競技規則は、国際ラグビーボード（IRB）が定める競技規則に準拠する。また、日本ラグビーフットボール協会制定の高専・高校以下の為の特別競技

規則、ジュニア・ラグビーの競技規則の該当する条項に関してはその趣旨を認識し準拠する。その中でU-12（12歳以下）に適用する独自の競技規則については、本U-12ミニラグビー競技規則において規定する。

I 競技規則の区分

ミニ・ラグビーの競技規則は、低学年用（小学校1・2年、U-7～8）、中学年用（小学校3・4年、U-9～10）、高学年用（小学校5・6年 U-11～12）に区分する。

II プレーヤーのグループ分け（チーム編成）

プレーヤーは各学年別にグループ分けすることを原則とする。

III チームの人数

チームは以下の人数で構成される。

- (1) 低学年 5人（フォワード1人、ハーフバック1人、バックス3人）
- (2) 中学年 7人（フォワード3人、ハーフバック1人、バックス3人）
- (3) 高学年 9人（フォワード3人、ハーフバック1人、バックス5人）

IV 競技場

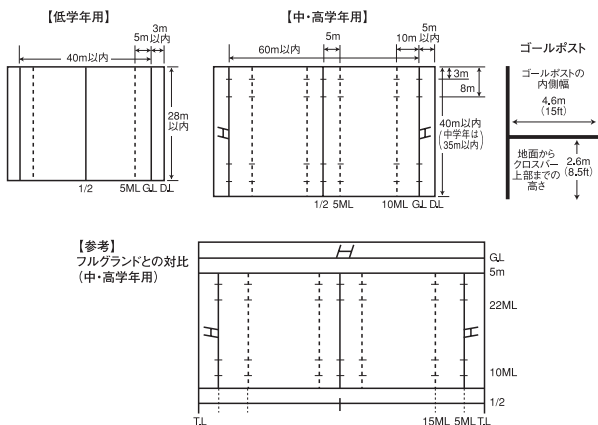
フィールドオブプレー、及びインゴールの広さは以下のとおりとする。低学年はゴールポストを使用しない。

- (1) 低学年 40メートル以内×28メートル以内、インゴール3メートル以内。
- (2) 中学年 60メートル以内×35メートル以内、インゴール5メートル以内。
- (3) 高学年 60メートル以内×40メートル以内、インゴ

ール5メートル以内。

【補足】

インゴールを必ず設営することを明記した。それに伴い、高学年のフィールドオブプレーの長さを10メートル短くした。これは、グラウンド設営の実態に対応するためである。



V 試合時間

- (1) 低学年 10分ハーフ以内
- (2) 中学年 15分ハーフ以内
- (3) 高学年 20分ハーフ以内

VI ボール

- (1) 低学年 3号ボールを使用する。
- (2) 中学年 3号または4号ボールを使用する。
- (3) 高学年 4号ボールを使用する。

Ⅶ 競技方法

1. キックオフ及びドロップアウト

(1) 低学年

- ① キックオフの代わりに、ハーフウェイライン中央においてタップキックからのパスを行う。
- ② ドロップアウトの代わりにゴールライン中央より5メートルフィールドオブプレーに入った地点にて、タップキックからのパスを行う。
- ③ 得点後のキックオフは、得点された側のチームがハーフウェイライン中央において、タップキックからのパスとする。

(2) 中学年・高学年

- ① キックオフはハーフウェイラインの中央から、ドロップアウトは10メートルライン上あるいはその後方から、それぞれ行う。
- ② 得点後のキックオフは、得点した側のチームがハーフウェイラインの中央、またはその後方から行う（中学年では、ドロップキックの代わりにパントキック、プレースキックが許される）。
- ③ キックオフは相手側の5メートルラインに達しなくてはならない。達しなかった場合はハーフウェイライン上中央のスクラムで再開する。ボールの投入はキックをしなかった側が行う。

2. キック

(1) 低学年

プレーを開始及び再開するためのタップキック以外のキックは禁止であり、これに反した場合はキックが行われた地点で相手にスクラムが与えられる。

(2) 中学年・高学年

- ① フライキック（戦略的・戦術的意図のない、コントロールされていないキック）をしてはならない。そのようなキックが行われた場合、キックが行われた地点で相手にスクラムが与えられる。
- ② ダイレクトタッチは10メートルライン内からのみ許される。10メートルラインの外からのキックが直接タッチに出た場合は、キックした地点で相手側にスクラムが与えられる。
- ③ 中学年では、ボールを手で保持した状況から以外のキック（地上にあるボールを蹴るようなキック）は禁止であり、これに反した場合はキックが行われた地点で相手にスクラムが与えられる。

3. タップキック

- ① ミニ・ラグビーにおけるタップキックとは、ボールを地面に置き、いずれかの方向にボールを明確に蹴り進めることであり、手の中のボールをチョンと蹴ることではない。
- ② すべてのペナルティにおいて、反則を犯さなかった側はタップキックによってプレーを再開する。その際、相手側は反則のあった地点（または低学年のキックオフ・ドロップアウトの地点）からゴールラインに平行して少なくとも5メートル下がる。

4. スクラム

スクラムは以下のように行う。なお、低・中学年で、スクラムで、防御側のスクラムオフサイドラインがスクラムより3メートル下がっていることをいいことに、スクラムからボールが出る前に攻撃側のプレーヤーが後方より勢い

をつけて走り込み、ハーフバックからフラットなパスを受けて突進を試みるプレーは、ペナルティキックまたはフリーキックにおけるいわゆる「キャバルリー・チャージ」に相当し、競技規則に反するプレーである。

【補足】

高学年ではスクラムからの「キャバルリー・チャージ」に相当するプレーを罰則対象とはしない。これは、攻撃側にも、スクラムの最後尾から3 mのオフサイドラインが設けられているためである。したがって、このようなプレーは起こりえず、起きた場合は、オフサイドの反則である。

(1) 低学年

- ① スクラムはフロントロー1人で構成する。
- ② スクラムを組み合わせる際、双方のフロントローは左右の足の位置をフラット（前後しない）にして、相手の上腕に軽く触れ、その後穏やかに組み合わせる。その際、お互いのフロントローは、左手は相手フロントローの右腕の内側、右腕は相手フロントローの左腕の外側になるようにして、相手フロントローのジャージーの背中または脇をつかむ。
- ③ 頭と肩が腰より低くならないようにまっすぐ組む。
- ④ スクラムが終了するまでバインドしていなければならない。
- ⑤ ボール投入は行わず、その代わりにあらかじめ攻撃側プレーヤーの右足元（つま先の前）にボールを保持する。そのボールを右足の裏で後方に押し出すことでプレー再開とする。
- ⑥ 防御側のハーフバックのオフサイドラインは、

スクラムを組んでいる味方プレーヤーの後方の足を通りゴールラインに平行な線である。ただし、スクラムから1メートル以上離れるプレーヤーはハーフバックではなく、バックスと見なされる。

- ⑦ 防御側のバックスのオフサイドラインは、スクラムを組んでいる味方プレーヤーの後方の足から3メートル下がったゴールラインに平行な線である。
- ⑧ スクラムにおけるオフサイドラインの解消は、ボール投入側のハーフバックのパスを、バックスのプレーヤーがキャッチした時点とする。
- ⑨ スクラムでは、プレーヤーの習熟度に応じて、頭を組み入れず、お互いの上腕をつかみ合うハンドスクラムを行うことができる。

(2) 中学年・高学年

- ① スクラムはフロントロー3人で形成される。
- ② フロントローのうち、中央のプレーヤーをフッカー、その両側のプレーヤーをプロップという。
- ③ フッカーは味方の両プロップの腕の上からその身体に腕をまわして、しっかりとわきの高さか、またはその下をつかまなければいけない（いわゆるフッカーのオーバーバインドの組み方。肩口は脇の高さとは認められない）。プロップも同じようにフッカーをつかまなくてはならない。
- ④ スクラムを組み合わせる際、双方のフロントローは左右の足の位置をフラット（前後しない）にして、相手の上腕に軽く触れ、その後穏やかに組み合わせる。その際、お互いのフロントローのうち、左プロップは、左手を相手フロントローの右腕の内側に、

右プロップは、右手を相手フロントローの左腕の外側になるようにして、相手フロントローのジャージーの背中または脇をつかむ。

- ⑤ すべてのプレイヤーが頭と肩が腰より低くならないようにまっすぐ組む。「ノンコンテストスクラム」ではあるが、お互いの体重を支え合うように組まなければならない。

- ⑥ スクラムを形成するプレイヤーは、スクラムが終了するまでバインドしていなければならない。

【中学年限定】

- ⑦ ボール投入は行わず、その代わりにあらかじめフッカーの右足元（つま先の前）にボールを保持する。そのボールをフッカーが右足の裏で後方に押し出すことでプレー再開とする。

- ⑧ スクラムが組まれるとオフサイドラインが生じる。

（ア） 防御側のバックスのオフサイドラインは、スクラムを組んでいる味方プレイヤーの一番後方の足から3メートル下がったゴールラインに平行な線である。

（イ） 防御側のハーフバックのオフサイドラインは、スクラムを組んでいる味方プレイヤーの一番後方の足を通りゴールラインに平行な線である。ただし、スクラムから1メートル以上離れるプレイヤーはハーフバックではなく、バックスと見なされる。その場合のオフサイドラインは上記「ア」が適用される。一旦、「ア」で定められたオフサイドラインに下がったハーフバックはスクラ

ムが解消されるまで、そのオフサイドラインを超えてプレーすることはできない。

- (ウ) スクラムにおいてのオフサイドの解消は、ボール投入側のハーフバックがボールをパスした時点とする。

【高学年限定】

- ⑨ スクラムは「ノンコンテストスクラム」であり、ボールの取り合い、押し合いはなく、ボール投入側が必ずボールを獲得するが、ハーフバックは、スクラムの中央に、まっすぐボールを投入しなければならない。ボール投入側が誤って相手側にボールを蹴ってしまった場合は、そのままプレーを続ける。フッカーは、故意にボールを相手側に蹴り出したり、自チームオフサイドラインまでボールを搔いてスクラムを終了させたりしてはならない。
- ⑩ スクラムが組まれるとオフサイドラインが生じる。
- (ア) スクラムに参加しないプレーヤー（ハーフバックを除く）のオフサイドラインは、スクラムを組んでいる味方プレーヤーの一番後方の足から3メートル下がったゴールラインに平行な線である。
- (イ) スクラムにおいてボールを投入しない側（防御側）のハーフバックのオフサイドラインは、スクラムを組んでいる味方プレーヤーの一番後方の足を通りゴールラインに平行な線である。ただし、スクラムから1メートル以上離れるプレーヤーはハーフバックではなく、バックスと見なされる。その

場合のオフサイドラインは上記「ア」が適用される。一旦、「ア」で定められたオフサイドラインに下がったハーフバックはスクラムが解消されるまで、そのオフサイドラインを超えてプレーすることはできない。

【例外】

防御側がボールを獲得した場合、「ア」まで下がった防御側のハーフバックは、獲得したボールをプレーするためにオフサイドラインを超えてプレーすることが許される。

- ⑪ オフサイドラインはスクラムが終了するまで解消されない。スクラムはボールを獲得した側のハーフバックがボールを触った時点で終了する。

【例外】

スクラムに投入されたボールが、スクラムに参加していないプレーヤーのオフサイドラインに偶然達した場合、スクラムは終了する。

- ⑫ スクラムへのボールの投入は、ハーフバックが行う。ハーフバックは、⑪【例外】の場合を除き、いかなる場合でもスクラムから出てくるボールを扱う最初のプレーヤーでなければならない。
- ⑬ ハーフバックは、あたかもボールに触れたかのようなそぶりやボールに触れずに時間を空費する行為をしてはならない。

【補足】

試合・練習でスクラムを組むにあたり、レフリー・コーチは、「フットポジション」、「アイコンタクト」、「クラウチ」、「タッチ」、「ポーズ」、「エンゲ

ジ」のキーワードを意識してフロントローを指導してください。

- ① 中学年と高学年は、プロップとフッカーを上記(2)－③のとおり、互いにしっかりバインドさせる。

② 「フットポジション」

足の位置はフラットになるようにしますが、フラットとは左右の足を平行しなければならないという意味ではなく、極端に前後せず、組み合ったときに自分の体重を支えられる位置とします。

③ 「アイコンタクト」

相対するフロントローと目を見つめさせ、相手および組み合うことを意識させる。

④ 「クラウチ」

見合ったまま、腰を落とし組み合う準備の姿勢をとらせる。

⑤ 「タッチ」

低学年は上記(1)－②、中学年・高学年は上記(2)－④のとおり、相手をつかませる。

⑥ 「ホールド」

相手をつかんだまま静止状態を維持させる。このときフロントローの姿勢を十分にチェックする。

⑦ 「エンゲージ」

頭が腰より低くならないようにゆっくりとまっすぐに組ませる。

5. ラインアウト

(1) 低学年

ラインアウトは行わない。ボールがタッチになった場合、タッチになった地点がゴールラインから5

メートル以内の場合はゴールラインから5メートルの地点より、それ以外はタッチになった地点より、投入側のプレーヤーが味方側にパスを行う。その際相手側はボールがタッチになった地点より3メートル下がり、ボールの投入を妨害してはならない。

(2) 中学年・高学年

ラインアウトは以下のように行う。なお、ラインアウトにおけるジャンパーに対するサポーターイングプレーは禁止とする。

- ① ボールがタッチになった場合、ラインアウトによって試合を再開する。
- ② ボール投入は、ボールがタッチになった地点から行う。ただし、ゴールラインから5メートル以内ではラインアウトは行わない。
- ③ ラインアウトに並ぶプレーヤーは1チーム2人である。先頭のプレーヤーはタッチラインから3メートル以内に立ってはならない。最後尾のプレーヤーはタッチラインから8メートルを越えて立ってはならない。
- ④ ボールを投入するプレーヤーの相手は、ラインアウトに近接して、タッチラインから3 m以内の位置にいないといけない。
- ⑤ 双方のプレーヤーの2つのラインの間には明確な空間（1 m）がなくてはならない。
- ⑥ ラインアウトが終了するまで、ラインアウトに参加していないプレーヤーはラインオブタッチから少なくとも5メートルは下がってはいなくてはならない。

- ⑦ ボールが8 mを超えて投げ入れられた場合、投入を再びやり直す。

【中学年限定】

- ⑧ ボールの競い合いはなく、必ずボール投入側がジャンプしてボールを取る。
- ⑨ ボールを取ったプレーヤーは必ずハーフバックにボールをパスしなくてはならない。
- ⑩ ハーフバックがボールをパスした時点でラインアウトは終了する。

【高学年限定】

- ⑪ ラインアウトは次の場合に解消する。
- (ア) ボールをもったプレーヤーがラインアウトの列から離れたとき。
- (イ) ボールまたはボールをもったプレーヤーが3 mラインとタッチラインの間、あるいは8 mラインを越えて移動したとき。
- (ウ) ラインアウトでモール・ラックができた場合、その密集に参加しているすべてのプレーヤーの足がラインオブタッチを越えて移動したとき。
- (エ) ラインアウトの列から自陣方向にパス・キック・タップされたボールにハーフバック役のプレーヤーが触れたとき。

6. ファウルプレー及びペナルティ

(1) ファウルプレー

- ① 以下のようなプレーはファウルプレーである。
- 防御の際に、相手をしっかりバインドせずに振り回す。

- ボールを持っているプレーヤーをチャージしたり、突き倒したり、あるいはタッチラインの外に突き出したりする。
- フェンドオフ（腕を横に振り、相手を払い除けるプレー）。
- モール・ラックを崩す。
- 頭部を相手に打ち付けるような姿勢で突進する。
- 安全が確保できないような体勢でボールを拾う。
- 相手に怪我をさせるような行為

これらの行為は、実際に起きた場合だけではなく、その危険性が予見されればファウルプレーである。レフリーはアドバンテージを適用することなく速やかに試合を停止する。

- ② 判定に対する異議、相手の反則のアピール、相手への礼を失した言動等、スポーツマンシップを損なう行為は厳禁である。

(2) ペナルティ

- ① すべてのペナルティにおいて、反則を犯さなかった側はタックルによってプレーを再開する。その際、相手側は反則のあった地点からゴールラインに平行して少なくとも5メートル下がる。
- ② 反則の地点が相手側ゴールラインから5メートル以内の場合は、マークは反則の地点を通る線上、ゴールラインから5メートルの地点でタックルを行う。
- ③ フリーキックも同様である。

7. コーチ

- (1) 試合中、コーチは定められた区域内に位置し、プレーヤーに対して指導的な指示、助言を行える。ただし、子どもの自主性、判断力、応用力を養うことからヒステリックに怒鳴ったり、子どもの人格を否定するような言葉を発したり、レフリーの判定に異議を唱えたりしてはならない。上記のような言動が見られた場合、レフリーは、試合を停止し、コーチに注意をする。それでも改善が見られない場合、レフリーはそのコーチを退場させる。退場を命じられたコーチは、速やかに競技場から離れなければならない。
- (2) 低学年の試合では、各チーム1名のコーチがグラウンドに入ることが許される。ゲーム中、グラウンドに入ることが許されたコーチは、自軍の最後尾のプレーヤーより後方で留まり、プレーヤーに対して建設的な指示・助言を行える。ただしヒステリックに怒鳴ったり、レフリーの判定に異議を唱えたりしてはならない。レフリーはコーチの言動が建設的ではない、あるいは試合の進行に妨げがあると判断した場合、試合を停止し、コーチに注意をする。それでも改善が見られない場合、レフリーはそのコーチを退場させることができる。退場を命じられたコーチは、速やかに競技場から離れなければならない。
- (3) コーチの不行跡により試合が停止した場合、試合再開は、スクラムで行い、プレーの停止が命じられたときにボールを保持していた側がボールを投入する。レフリーはコーチに注意以上の処分を与えた場合、試合終了後速やかに主催者にその旨を報告する。

附 記

〔実施時期について〕

2010年-2011年、U-12ミニラグビー競技規則は、原則として2010年（平成22年）9月1日から適用します。

MEMO

MEMO



平成22年度
競技規則

平成22年9月1日発行

編集 財団法人
日本ラグビーフットボール協会

発行者 財団法人
著作 日本ラグビーフットボール協会
〒107-0061東京都港区北青山2-8-35
電話 03-3401-3321
